

立春祭 理事長お話

「立春祭」、おめでとうございます。

今年の冬は、北陸をはじめ記録的な大雪になっている所もありますが、本日は全国各地より、ようこそ聖地にご参拝くださいました。

瑞雲郷では、厳しい寒さの中にも、梅のお花が開き始めています。

また、昨年「聖地総合建設」の一環としてリニューアルオープンしたMOA美術館では、所蔵「名品展」と題して、国宝「紅白梅図屏風」などの展観が始まっています。

明主様は、「美はしき花見る毎に憶ふかな神の恵みの如何に深きを」というお歌をお詠みになっています。

本日は、瑞雲郷において、明主様とご一緒に梅のお花にかすかな春の予感を感じながら、神様の無量無辺の恵みにどのような時も包まれていることを思い出させていただきましょう。

そして、この深きみ恵みが、全てのものに分け与えられますようにお仕えさせていただきます、との思いを持って、聖地を出発させていただきたいと存じます。

明主様は、「人の眼に見えねど神の経綸は已に成りけり^{たま}霊の世界に」と、お歌を通してみ教えくださっています。

また、明主様は、「天国在我心中」（天国が我が心の中に在り）や「地上天国在吾心」（地上天国吾が心に在り）などの御書を私どもに授けてくださり、神様の成し遂げられた天国が私ども一人一人の内側に燦然と輝いていることをお示しく下さいました。

本日私どもは、明主様と共にあるメシアの御名に結ばれたものとして、意義ある「立春」を心からお祝いさせていただきましたが、明主様は、「立春」について、神様のお働きが一際大きくなる旨み教えくださっています。

私は、このようにして、神様が「立春」という大切な節目をご用意くださったのは、私どもが、自らの内側にある命の源である天国に、少しでも心に向けることができるようにお計らいくださっているからではないかと、受け止めさせていただいております。

ですから、私は、本日の意義ある「立春祭」において、大光明の燦然と輝く天国が、神様のみ旨と共に、私の内側に、全てのものの内側に、すでに確かに成っていることを認めさせていただきましたとの思いを、感謝をもってご奉告させていただきました。

併せて、「真善美」配布を力とする「会う、聞く、浄霊」をはじめ、日常生活

のさまざまな事柄を「想念の御用、の実践の場とさせていただき、全てのものとともに、自らのうちに実在する天国に立ち返らせていただくという本当の救いにお仕えさせていただき決意を、大いなる希望をもってご奉告させていただきました。

先ほどは、全国の信徒の皆さまを代表して、〇〇布教区〇〇布教所の〇〇さんが感謝奉告をしてくださいました。ありがとうございました。

〇〇さんは、教主様が、明主様のみ教えの神髄をひたすら求められ、お伝えくださるご教導を学び、実践させていただこうとする中での大切な出来事についてご奉告くださいました。

私は、〇〇さんのご奉告の中で息子さんがおっしゃった言葉、「何がおかしいの。今まで魂を自分のものとしていたことに気付かせていただき、悔い改め、天国に立ち返って魂をお返し申し上げ、あらためて神様の魂としてお受けさせていただくこと。だから新しく生まれるって書いてある」、この息子さんの言葉を、今、神様が私自身に投げ掛けてくださっている言葉のように感じさせていただきました。

私は、「今まで魂を自分のものとしていた」というくだりの所に、例えば、命についてはどうだろう、心や思いについては、言葉については、また、体をはじめお金や万物についてはどうだろう、さらには、み教えについては、浄霊については……と、このように考えた時、「今まで全てを自分のものとしていた」と置き換えて考えてみることを、神様が私におっしゃっているように思わせていただきました。

そして、明主様をご在世中の最後に、人類の救いにとって極めて大切なこととしてお伝えくださった「新しく生まれる」ということについて、私自身の中に、〇〇さんの中に、ご主人や息子さんの中に、全ての人の中に、「新しく生まれる」という道がすでに確かに成っているからこそ、だからこそ、神様が意義ある「立春祭」の日の感謝奉告として、私ども自身のこととして聞かせてくださったのではないかと、感謝をもって受け止めさせていただきました。

さて、本日は皆さまにご報告しなければならないことがあります。

1月30日の包括法人世界救世教の「責任役員会」において、いづのめ教団の小林理事長と東方之光の長澤、入江、森の三名の役員が、①之^オ光教団に対し、教主様のお姿とお言葉に倣う「教団方針」が、世界救世教の教義に著しく違反しているとの見当違いの嫌疑を掛け、仲泊管長が反対する中、①之^オ光教団に対する包括・被包括関係の廃止を強行採決するという暴挙に出ました。

このことを受け、^{すのひかり}⑤之光教団の専従者や信徒に対して、「⑤之光は救世教から追い出された。もう聖地に参拝できない」などの悪意に満ちた脅迫とも取れる動きがすでに始まっています。

まず、誰よりも明主様のみ心を求めておられる教主様のお言葉が、教義に違反しているという主張、そして、その教主様のお姿とお言葉に倣い、明主様のみ教えの神髄に少しでも近付こうとする私どもが、教義に違反しているという主張そのものが全く荒唐無稽のものであり、断じて受け入れることはできません。

もちろん、この決定に対して教主様は了承されなかったと聞いております。

そして、包括・被包括関係を廃止するには、包括法人の規則変更が必要となり、そのためには、包括責任役員七名の全員一致の議決が求められます。

その上、教主様の承認が必要となりますので、包括・被包括関係の廃止は完結致しません。

今後、⑤之光教団として法的措置も講じてまいります。いずれにせよ「世界救世教⑤之光教団」としての宗教法人の法人格を失うことはなく、世界救世教の信徒たる身分は全く揺るぎません。

信徒の皆さまにはご安心いただき、さまざまな非難中傷や流言飛語に惑わされないようにしていただきたいと存じます。

私ども世界救世教⑤之光教団の信徒は、どこまでも“明主様の真実、を全身全霊にお受けさせていただくことを心から願うものであります。

明主様のみ教えを貫いている「地上天国建設」「人類救済」「真文明世界の創造」という御言葉があります。

⑤之光教団は、こうした明主様の御言葉に込められている本当のみ心と、その源にある神様のご意志を、何としても受け継ごうとする強い覚悟を持たれた教主様のご教導にあずかることを、“明主様の真実、に迫る上において極めて大切にさせていただいております。

だからこそ、私どもは、“本当の明主様、に辿り着くために、教主様のお言葉を唯一絶対無二の拠り所としているものであります。

私どもは、明主様は今も生きておられ、信徒はもちろん、全人類をご自身のみ心の中に迎え入れて、ご経綸をなさっておられると信じています。

明主様は、ジャーナリストとの対談において、「教祖がなくなれると、後、救世教はどういうことになりますので」との質問に、『霊界から働きますから、何でもないです』（栄光267号 昭和29年7月28日）と、お答えになっています。

明主様は、昭和29年6月5日における「明主様御言葉」で、「メシヤ降誕」を宣明なされ、『もっと詳しい話ができる』と仰せになりました。

また、『ただ一言だけ言いますが、いよいよ御神業の本スジに入ってきたわけ
です。ですからこれからいろんな変わったことがたくさん出てきます』（明主様御
言葉 水晶殿御遷座 昭和29年12月11日）と、お述べになっています。

さらに、『しゃべれるようになったら、実に奇想天外なことをお話するとは思
うんですが、それだけに、楽しみにしててもらいたい』（立春祭 明主様御言葉
昭和30年2月4日）とも、仰せになりました。

このように、明主様は、私どもにお伝えくださることがまだまだ種々あること
をお示しくださっています。したがって、遺してくださったみ教えと同時に、『靈
界から働きます』とおっしゃってくださったように、今も大切なことを教えてく
ださっているということでもあります。

「教義」とは、明主様の示された教えである原典と、原典に基づき世界救世教
が編纂した教典の両方を意味します。

私が、今申し上げた明主様の御言葉は、全て「教義」に当たります。

そして、世界救世教の教規には、「教主は、教義、祭儀及び聖地建設の大綱（根
本的な事柄・おおもと）を定める」と明確に規定されております。

いつの時も、明主様が靈界からお働きくださっていることは、明主様の信徒で
あるものにとっては、自明のことでもあります。

私どもは、明主様のみ教えとご事蹟を、どこまでも大切に受け止めさせていた
だかなければなりません。そして、今も明主様がお伝えくださろうとしておられ
ることを、しっかりと受け止めさせていただく信仰を持たねばなりません。

私どもは、教主様のご教導を賜り、教主様ご自身が全身全霊をもって明主様の
み教えを学ばれ、明主様のみ心を求めておられる、その結果としての教主様のお
言葉であることを、痛切に感じさせていただくものです。

教主様は、誰よりも明主様と明主様が帰一された主神に帰すことに努めておら
れます。その教主様に、私どもは倣わせていただくということでもあります。教主
様がお示しくださっている信仰のお姿に倣わせていただくということでもあります。

私どもがこうした思いを持って信仰の道を進んでいくことは、明主様のご照覧
くださることではあっても、異をお唱えになることでは決してないと信じていま
す。

教主様は、昨年11月に京都・平安郷で行われた、いづのめ教団「北陸関西教区
信徒総代会」におけるお言葉の「追記」の中で、次のように仰せになりました。

明主様は「世界人類の救済からゆくと、メシヤ教はよほどキリスト教に近く
なる。いずれはそうなるべきだが、ようやく時期が来たのである」と御教えく

ださいましたように、救世教とキリスト教が呼応していくのは、明主様の御心だと思えます。

私は、教主の立場として、また、明主様の一信徒として、何があろうと、この、明主様のおっしゃる人類救済の御心を求めていかなければなりません。

その中で、御教えはもちろんのことですが、キリスト教の教典である聖書についても、自分の空いた時間を使い、少しずつでも学んでいくことは大変大切なことであり、明主様もそのごとく私を導いておられる、としかどうしても思えないのです。

特に、現在、いづのめ教団につながる海外信徒が在住する国や地域が百か国に及び、その多くがキリスト教圏であることを考えますと、そうした地域に属する人々が納得しうる明主様の御教えの説き方、特に、メシアという言葉の説き方が今求められていると言わざるを得ません。

そのためにも、私は、人間の持つ狭い見方から脱却し、夜昼転換した、主神の全く新しい養いの中で、学びを深めさせていただかなければならないと思っています。

キリスト教化や、私の友人との関係について、私の申し上げていることを信じるのか、信じないのか。私が明主様の御心を求めていると信じるのか、信じないのか。明主様が私を導いておられると信じるのか、信じないのか。

それを皆様お一人お一人にお決めいただきたいと思えます。

教主様はこのように仰せになり、さらに続けて、

明主様は、昭和25年の立春をさかいに、世界救世教とキリスト教との関係について、思いが深まっていかれたと思えます。

昭和25年以降、明主様は、救世教は「よほどキリスト教に近くなる」、救世教は「キリスト教と呼応」する、「罪を悔改めるに最も力あるものとしては、『聖書』に優るものはない」等御教えくださっております。

そして、教団の名前を世界メシヤ教とされ、メシヤ会館を建てられ、その中に、キリスト教音楽の最高峰とも言われているヘンデル作曲の「メサイア」を演奏するオーケストラボックスを作られました。

私は、どこまでも明主様の御教えを求めているものです。明主様の御生涯を見つめているものです。明主様の御心に少しでも近づかせていただきたいと願っているものです。

もし御教えに込められている御心を求めている私が、救世教をキリスト教化している、と言われるのであれば、明主様も同じことになってしまうと思いま

す。しかしながら、明主様がそうであったように、私も、救世教をキリスト教化するつもりなど一切ありません。

このように、「明主様の真実」を求めておられるお心を明かしてくださいました。

私どもは、自分本位、人間本位の信仰の中で、自分にとって都合の良い明主様、組織にとって都合の良い明主様だけを求めていて良いのでしょうか。

明主様ご昇天から半世紀以上が過ぎましたが、明主様をご在世中の最後に、人類の救いにとって極めて重要なこととしてお示しになった、「新しく生まれる」との御言葉や「メシアの御名」を、心からの感謝をもって受け止め、宣べ伝えさせていただく道を、今教主様が開いてくださいました。

私どもは、明主様の信徒として、この人類待望の道を決して閉ざしてしまう訳にはまいりません。

私は、この道をひたむきに進ませていただくことが、明主様の信徒として受け継がせていただく最も大切な務めであると心から信じています。

明主様は、「大救主の御名は最後の世を救ふ尊き御名なり心せよかし」というお歌を私どもにお与えくださいました。

私は、明主様が「心せよかし」とおっしゃった「メシアの御名」を、心の中心にお受けさせていただけるものでありたいと、今強く思わせていただいております。

私どもは、今年の「御生誕祭」において、「ハレルヤの歓呼の渦の直中に静かに天降るメシヤキリスト」という明主様のお歌を奉唱させていただきました。

明主様は、このお歌の中で、「静かに天降る」と仰せになっています。また、他のお歌でも、例えば、

「盗人の来つるが如く窃やかに下生しましぬ五六七大神」

「長き世の暗の帳もひそやかに明け放れけり神の光に」

あるいは、「世界救世教」開教後のご法難の折にも、

「大神は珍の神業ひそやかに成さしめんとて牢獄選みぬ」

とお詠みになっています。

私は、「静かに天降る」「窃やかに下生しましぬ」「ひそやかに明け放れけり」「ひそやかに成さしめんとて」というお歌の御言葉から、私どもは、すでに現れている神様のみ業に気付いていないのかもしれないという思いをもって、また、「自我のわたし」が知らない明主様がいらっしゃるという思いをもって、もう一度み教えや浄霊をいただき直す謙虚さが、今極めて大切なのではないかと思わせていただきました。

私ども^す①之光教団の信徒は、ご自身の子供たるメシアとして全人類を新しく生まれさせるといふ神様のご意志が、人類一人一人の内側に輝いていることに、どのような時も心に向け、一人でも多くの方にこの「天国の福音」をお伝えしてまいりたいと思います。

今年私どもは、世界救世教②之光教団の信徒として、新たに開設されたホームページのトップに記されている大切な言葉をしっかり受け止めて進みたいと思います。

「私たちは、神さまの子どもとなるために生まれてきました」

私どもは、この言葉を心に刻み、「想念の御用」をもって「全く新しい布教」にお仕えさせていただけるよう、「真善美」配布を力とする「会う、聞く、浄霊」を中心に、コツコツ一生懸命努力を積み重ねる一年とさせていただきます。

最後に、私どもは来月、熱海・瑞雲郷において、教主様にご出座賜り、「春季大祭・豊穰祈願祭」をお迎え致します。

教主様は、「新年ご挨拶」の中で、

明主様が「地上天国建設」や「人類救済」を呼びかけてくださったのも、主神が明主様を通して、地上にいる私どもの思いを少しでも天国に向けさせ、その天国に立ち返って、真の親を知るといふ、全人類にとっての本当の救いに目覚めさせようとしておられたからではないでしょうか。

と、このようにお伝えくださっています。

私は、「大光明」のご神体奉斎についても、また「聖地参拝」についても、やはりこのような神様のみ心が込められているものであり、明主様からの天国への呼び掛けであると固く信じております。

私どもは、今年も一年を通じて、神様の子供としてしっかりと実を結ばせていただくことを願い、全国の皆さまとご一緒に大祭に臨ませていただきたいと思います。

「立春」を迎えた今月度の皆さまのご神業奉仕の上に、大いなるみ恵みと安らぎを賜りますようお願いさせていただき、「立春祭」の挨拶とさせていただきます。
ありがとうございました。